

市政ニュース

戸島湿地整備基本構想・計画を策定委員会が報告 コウノトリが舞い降りる湿地を整備

城崎町戸島に整備を計画している(仮称)戸島湿地についての基本構想・計画報告書が、1月9日、策定委員会(会長＝三橋弘宗・県立人と自然の博物館主任研究員)から、中貝市長に提出されました。本報告書には、約3・8ヘクタールの農地などに、県と一体となって平成19年度から2年をかけてコウノトリが舞い降りることができ、湿地環境を整えるとともに、管理棟や観察小屋などを整備することが示されています。また、持続・自立的な維持管理を推進するため、NPO法人を設立し、全国からの寄付金によって運営する仕組みを構築することも提案されています。

海・山・川がコンパクトにまとっており、海水・汽水・溪流域がつながり合っている生態系の見本市ともいえる貴重な場所です。なぜコウノトリが日本で最後まで豊岡に生息できたのか、今回の戸島湿地の環境づくりを通して考えていくことも大切ですよ」と話していました。

三橋委員長は、報告書提出の際、中貝市長に対して「戸島湿地一帯は、



▶中貝市長に報告書を手渡す三橋委員長と由留佐副委員長(戸島区長)

学校整備審議会が小・中学校の整備のあり方について答申 規模の下限の目安を設定、施設整備は耐震補強を基本に

2月6日、学校整備審議会(会長＝加治佐哲也・兵庫教育大学教授)から久本教育委員長に、豊岡市立の学校整備のあり方についての答申書が提出されました。

昨年6月、市教育委員会からの諮問を受けて、同審議会では、少子化時代における小・中学校の規模のあり方や、喫緊の最優先課題である校舎の耐震化の進め方について検討を進めてきました。

まず学校規模のあり方については、教育的観点から下限の目安を定めることとし、小

学校では、各学年とも複式学級にならない50人程度、中学校では、全学年に複数学級が設けられる180人程度をその下限とすることが示されています。その際、現時点で下限の目安まで減少し、その後

も減少が予測される場合は、小規模校の特性を生かすとともに統合も視野に入れることにしています。

施設整備のあり方については、施設の耐震化が最優先課題であることから、国の方針を受けて耐震補強を基本に、整備期間はおおむね10年をめ

どとし、学校ごとの耐震診断の順位を決めています。特に、耐震化を要する学校のうち、現時点で下限の目安まで減少し、その後も減少が予測される場合は、統合の検討順位を優先的に設定しますが、その際、住民の意向などを総合的に勘案することとしています。

なお、教育委員会では、この答申をもとに今年度中に学校整備の方針を定めることとしています。

詳しくは市ホームページをご覧ください。

マックスバリュ西日本・コメリ災害対策センターと災害協定を締結 災害発生時の防災活動を円滑にするために

1月16日、マックスバリュ西日本株式会社と災害協定を締結しました。

この協定書には、市の要請によって同社が保有する食料や日用品などの物資を供給することや、市内にある店舗(日高店)駐車場を被災者に一時避難場所として提供すること

が盛り込まれています。

市役所で行われた調印式には、中貝市長と藤本 昭社長ほか同社の関係者などが集まり、協定書を交換しました。

中貝市長は、「地震や水害など、いろいろな災害を想定して市は備えをしなければなりません。さまざまな災害を経験

し、多くのノウハウを持つ貴社から支援を受けることは非常にありがたいことです」と感謝の言葉を述べました。

また、1月17日には、NPO法人コメリ災害対策センター(理事長 榎 賢一)とも保有物資の提供に関する災害協定を締結しました。

新聞記者から見た環境保護の現場報告会

新聞記者2人が取材成果を報告

読売新聞社豊岡支局の松田聡さんと朝日新聞社豊岡支局の古田大輔さんの両記者を講師に迎え、2月3日、コウノトリ文化館で、環境保護の現場報告会を開催しました。

コウノトリの越冬地である中国を取材した松田さんが「経済優先の中国では環境破壊が危惧されています。豊岡が環境と経済の両立のモデルになってほしいですね」と話す、世界遺産である屋久島のエコツーリズム（環境問題

に重点を置き自然と調和した観光事業）を取材した古田さんは、「豊岡市が取り組むコウノトリツーリズムは中身を作り上げている段階。屋久島のような完成度の高い旅行プランの作成とガイド育成が今後の課題です」と訴えました。

参加者は両記者の熱の入った現地取材の報告に耳を傾け、コウノトリとともに暮らすまちのあり方に思いをめぐらせていました。

学校図書館・読み聞かせボランティア研修会 地域住民が子どもの読書活動を支援

1月29日、市民会館で、学校図書館・読み聞かせボランティアを対象にした研修会を開催しました。

同ボランティアには、現在、約380人の市民が登録しており、市内全小学校と半数の中学校で本の読み聞かせや図書館の整理、本の紹介などの活動を実施しています。

研修会当日は、港西小学校

と豊岡北中学校のボランティアが実践発表を行うとともに、参加者82人が各分科会に別れ、活発な意見交換を行いました。参加者の1人は「多くのボランティアの皆さんが頑張っていることを知りとても参考になりました。私の学校でもできることから始めていきます」と今後の意気込みを語っていました。

ニュージーランド・ルアペフ市の高校生が来市

中学校の授業に参加し日本語と文化を学ぶ

ニュージーランド・ルアペフ市のタウマルヌイ高校生一行が、1月24日から31日まで、日高地域を中心にホームステイなどをして滞在し、市民と交流を深めました。

同市とは、平成12年、旧日高町時代に姉妹都市提携を結び、以後、学生を中心に訪問団を相互に派遣しています。今回は、日本語を専攻している生徒8人と引率の教諭2

人が来市し、日高東中学校や西中学校で授業を受け日本語を学ぶとともに、スノーケリングやコウノトリの見学などを通して豊岡の自然を満喫しました。

生徒の1人は、「ニュージーランドは鳥の楽園ともいわれたいますが、絶滅の危機にさらされている鳥がたくさんいます。コウノトリの野生復帰の取組みがうまくいけばいいですね」と

韓国慶州市・東川初等学校児童が出石を訪問

交流会やホームステイで交流を深める

1月22日から24日にかけて、韓国慶州市から東川初等学校国際交流体験学習団33人（児童29人、引率4人）が出石を訪問しました。同市と旧出石町は、平成3年に国際友好親善交流宣言を調印してから相互に国際交流を進めており、同市からの児童の訪問は今回で10回目でした。

学校での交流会に参加し、ゲームや合唱、昼食などで交流を深めました。

また、引率の教諭たちは市役所を表敬訪問しました。その際、中貝市長が「まずはお互いを知ることが第一です。そちらを訪問した出石の子どもたちはいつも慶州を大好きになつて帰ってきています」と話すと、団長の金熙吉（ヒキル）教頭は「子どものときから交流すればお互いの先入観がなくなり、関

係がよくなります」と笑顔で応えていました。



▲西中学校で書道を体験するニュージーランドの高校生



▲福住小学校の交流会で、けん玉に挑戦する慶州市の児童たち